

誓願不思議

——親鸞聖人の宗教的自覚の特質——

寺川俊昭

一

『歎異抄』の本文が、「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて」という、特徴ある言葉で始まることは、周知の通りであるが、この「誓願不思議」という言葉で、親鸞聖人が表わそうとする宗教的自覚は、恐らくは極めて高い質と複雑な内容をもつものであって、その内容を明確に了解することは、かなり困難であるように思われる。この困難さは、『歎異抄』の現代語訳において、この言葉が研究者によってどのように意識されているかを見ることによって、自ずとかなづかれるに違いない。

- (1) 阿弥陀仏の不可思議な誓願にたすけられ奉って、必ずお浄土へ生れるのである、と信じて……。

(多屋頼俊氏『歎異抄新註』)

- (2) われわれ人間の思議を超えた阿弥陀仏の誓願にた

すけられて、このたび、わたしは、浄土に生まれさせただけの身となると信じて……。

(早島鏡正氏『悪人正機の教え 歎異抄』)

- (3) 弥陀の誓願の不思議にたすけられて往生をとげるのだと信じ、……。(増谷文雄氏『歎異抄』)

- (4) 阿弥陀の、すべての者を救いとげずにはおかないという誓願の大いなる力にたすけられて、かならず浄土に生まれるのである、と信じて、……。

(『歎異抄講座』第一巻、弥生書房)

- (5) 弥陀の誓願の不思議な力におたすけただいて往生をとげるのだと信じ、……。(野間宏氏『歎異抄』)

「誓願不思議」というこの訳しにくい言葉は、これらの諸説と研究者の註釈によってみるに、不思議という言葉や誓願にかかる修飾語とみて、「人間の思議を超えた阿弥陀仏の誓願」と解釈されるか、或いは誓願のはたらきを表わす言葉とみて、「誓願の大いなる力」というふ

うに了解されている。どちらの解釈を採るにせよ、一応の正しい了解であるには違いないが、私は猶一点、そこに親鸞聖人の宗教的自覚の高さに十分に触れていないものを感ずる。

一体、親鸞聖人がその独自の信仰的自覚を表現するのに、しばしばこの「誓願不思議」という言葉を使用したことは、『歎異抄』の十をこえる使用例からも、容易に窺われる通りであるが、同様の用語例は、例えば『和讃』を開くならば、我々は到る所に見出すことができるであろう。

- (1) 誓願不思議をうたがひて。
- (2) 仏智不思議をうたがひて。
- (3) 不思議の誓願あらわして。
- (4) 名号不思議の信心を。
- (5) 仏智不思議を信ずれば。
- (6) 他力不思議にいりぬれば。
- (7) 南無阿弥陀仏の廻向の 思徳広大不思議にて。
- (8) 選択本願信すれば 不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみたり。

「不思議」或いは「不可思議」という言葉は、仏教的真理の超越性を表わす言葉として、早くから使用されてい

たのであるが、それを「誓願」と、更にそれに止まらず「名号」「仏智」という種類の言葉と組み合わせて、一つの熟語として用いたのは、恐らく親鸞聖人の独創的仕事ではなかったろうか。しかもその際、「不思議」というこの言葉が、「誓願・仏智・名号・他力・廻向」というような、いわば如来に属するものとしてそれ自身超越的でありながら、同時にその超越的なものが、衆生へのはたらきかけを自らの本質として本来持っているという、いわば力動的な概念と結合して用いられている点に、我々は注意したい。このことによって、誓願不思議等のこれら一群の言葉は、如来の世界が衆生の上に自らを開いて、しかもそのままに超越的であるという、独自の極めて豊かな意味を表わすこととなるのである。

二

「不思議」という言葉に、親鸞聖人が深い意味を託することとなったのは、恐らくは近くは『浄土論註』の指南によるものがあつたことが思われる。即ち天親菩薩が自らの一心帰命の信において願生せる阿弥陀仏の国土について、「成就不可思議力故」と語るその言葉を承けて、曇鸞大師は『智度論』の五種不可思議により、次のよう

に解釈するのである。

不可思議力とは、惣じて彼の仏国土の十七種の莊嚴功德力、思議することを得べからざるを指す也。諸經に統じて言わく、五種の不可思議有り、と。一には衆生多少不可思議。二には業力不可思議。三には龍力不可思議。四には禪定力不可思議。五には仏法力不可思議。此の中の仏土不可思議に二種の力有り。一には業力、謂く、法蔵菩薩の出世の善根と、大願業力との所成なり。二には正覺の阿弥陀法王善任持力に攝せられたり。

この解釈を通して曇鸞大師が、不可思議なる仏土の莊嚴功德を保持するものとして見出したのが、法蔵菩薩の大願業力と、阿弥陀仏の善任持力である。しかるに、この二つの力こそ、如来の不虛作住持の功德に外ならない。

言う所の不虛作住持とは、本と法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願相かなうて畢竟じて差わず、故に成就と曰う。

真に不可思議なるものは、三界の道に勝過せる阿弥陀の浄土の莊嚴功德をえ支、それを通してはたらく、如来そ

のものの威神功德である。曇鸞大師の了解は、このことを指し示していると考えられる。

この不可思議の根源としての不虛作住持功德は、『浄土論』に的確にして美しい言葉で語られてあることは、周知の通りである。

親仏本願力 遇無空過者

能令速満足 功德大宝海

この頌を翻訳した親鸞聖人の『和讃』によってみれば、「親仏本願力」とは「本願力にあひぬれば」ということであるから、この頌を生み出した原体験、いい換えれば、如来の不虛作住持の功德を感得した体験とは、本願との、或いは如来との値遇という経験に外ならない。この如来との値遇という端的な事実が、法蔵の願力と阿弥陀の神力との二つの契機を以て了解されているのは、恐らくこの値遇経験が本来、この二つの契機なくしては現前し得ない性格をもつからに外なるまい。如来との値遇において端的に感得されている事實は、無限なる光明に照らされてある我的発見そのことである。しかもこの所照の自覚は、この自覚そのものが、自分に対する根源的喚びかけ即ち本願の叫びによって開かれたものであることに、深々とうなづいているに違いない。要するに、果上の阿

弥陀神力に値遇しては、そこに因位法蔵の願力を内觀し、因位法蔵の願心に喚び覺まされては、そこに本願成就の阿弥陀に値遇する、このような力動的な構造を、如来との値遇はもっているのである。従って、今この値遇において不可思議が感得されるとすれば、不思議とは端的には、起り得べからざることが、今現に私の上に起こっているという、値遇の感動に外ならない。

のみならず『浄土論』は、更に深い意味を開示する。本願力に遇う者は、自らの空過の悲惨さに打ち勝った感動の中で、よく速かに功德の大宝海をその身に満足するのであると。親鸞聖人の了解によるならば、「金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつ」る（『一念多念文意』）のである。しかもその「功德大宝海」とは、『尊号真像銘文』によるならば、「如来の功德のきわなくひろくおほきにへだてなきことを、大海のみづのへだてなくみちみてるがごとしとたとへたてまつるなり」と、解釈されているのである。

ここに至って我々は、親鸞聖人が不思議という言葉で語ろうとする事実の核心に、漸く辿り着いたようである。そこには如来の廣大無辺際なる功德がある。大海にも譬えられる如来の功德とは、取りも直さず、『大無量寿経』

に、

如来智慧海

深広無涯底

二乗非所測

唯仏独明了

と讃詠されている、その深広無涯底なる如来智慧海に外ならないではないか。如来の智慧の自証する、無上涅槃の世界に外ならないではないか。その如来の自証の世界である無上涅槃界は、ただ仏と仏とのみしろしめすものである。生死海にある衆生にとっては、畢竟一つの超越的世界であり、ただ不可思議として仰ぎみられる外はない境界である。しかし、ただそれに止まるのではない。その不可思議の超越的世界である如来智慧海の徳が、一度び衆生が如来に値遇することができた時、直ちに衆生の上に開かれて来るのである。即ち本願の信を獲得することができた時、如来智慧海の自証する無上涅槃の徳を、衆生はその身に感得することができるのである。この驚くべき事実の感動こそ、不思議と表現される外ないその当体なのである。

どのような道理によって、この驚くべき事実はあるのか。相対有限なるものの上に、絶対無限が表顯する、このことは一体何によって現に起り得るのであろうか。この道理を表わすものが、誓願不思議と親鸞聖人が熟語

する、その誓願であり、名号であり、他力であり、廻向であるのではないのであろうか。この道理があるからこそ、相対有限における絶対無限の表顯ととっても、啓示のように無媒介的な直接性においてではない。却ってかつて曾我量深先生が「如来、我となって我を救ひ給ふ」〔地上の救主〕と喝破せられたように、自己を根源から喚び覚まし、目覚ましめるような態で、そのことは起る。自己の虚妄性を内から破って来るような感銘と共に無限真実なるものは衆生の上に表顯する。そして実はこの所に、親鸞聖人が誓願不思議と表白する、露堂々たる宗教的自覚の秘義が存するのである。

弥陀の誓のゆへなれば

不可称不可説不可思議の

功德はわきてしらねども

信するわがみにみちみてる

不可称とまふすことは、ことばにあらわしがたきこととなり。

不可説とまふすは、弥陀の功德をときあらはしがたしとまふすことばなり。

不可思議とまふすは、仏の御ちかひ、大慈大悲のふかきことを、こころのおよばずとまふすことばなり。

こころおよばずといふことは、凡夫のこころおよばずとまふすことにはあらず、弥勒菩薩のおむこころおよばずとなり。仏、仏とのみぞしらしめすべきなり、それをふかしぎとはまふすなり。〔善導和尚言〕

親鸞聖人によって開顯された、浄土真宗の宗教的自覚は、勿論本願の信として表わされるのであるが、我々を限りなく根源に招喚する本願の声に喚び覚まされるということは、実はそのまま、衆生が如来智慧海の所証である無上涅槃界に直入する、かけがえのない通路という意味をもつ。この誓願不思議なる事実に立ってみる時に、恐らく本願を信ずるといふ事実の意味は、正當に了解されるに違いないのである。

ちかひのやうは、無上仏にならしめむとちかひたまへるなり。無上仏とまふすは、かたちなくまします。かたちのましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上仏とはまふさず。かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはまふさず。かたちもましまさぬやうをしらせむとて、はじめて弥陀仏とぞきぎならひて候。みだ仏は自然のやうをしらせむれうなり。〔末灯鈔〕

そしてこの誓願不思議という事実に立って、再び眼を転ずる時、如来の誓願が既に『無量寿経』として言説されているという事実が大いなる不思議であり、その本願において選び取られた南無阿弥陀仏という言葉が、人間を限りなく還滅せしめる言葉として、この流転の世の只中に存在すること自体が、思えばまた不思議なのである。のみならず、三国の歴史を通じて、名号が常に浄土教の歴史的现实として現前し続けて来た事実が不思議であり、その歴史即ち名号の現行の歩みに発遣せられて、本願の信において数限りない人間が、向涅槃の一無礙道に立つこと自体が、不思議という外はない事実なのである。親鸞聖人にとって、誓願不思議というのは、このような極めて豊かな内容をもつ、宗教的自覚の表明に外ならなかったのである。

三

ここで再び、誓願不思議の根拠である不虛作住持功德について、考えてみたい。如来のこの功用を、親鸞聖人は「よく本願力を信樂する人はすみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむる也」(『尊号真像銘文』)と了解したのであるが、若し功德大宝海の根本を

既に見て来たように、如来の自内証たる無上涅槃の徳とすれば、「速にとく功德の大宝海を、信ずる人のその身に満足せしむる」とは、一体どういうことであろうか。それこそ曇鸞大師が阿弥陀の浄土の清淨功德として、

凡夫人の煩惱成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繋業畢竟して索かず。則ち是れ、煩惱を断せずして涅槃分を得。焉んぞ思議すべきや。と語り、恐らくはそれを承けて親鸞聖人が、

能發一念喜愛心 不断煩惱得涅槃

凡聖逆誘齊廻入 如衆水入海一味

と表白した、その「不断煩惱得涅槃」という事実を指すのではあるまいか。そしてこの「不断煩惱得涅槃」という一句こそ、親鸞聖人の宗教的自覚の面目を躍如たらしめる、迸り出る叫びにも似た一句なのである。

若し仏本願力として「不断煩惱得涅槃」を語るならば、それは曇鸞大師が解釈したように、浄土の徳であろう。

浄土こそ本願の成就した世界として、本願を証明する場所であるからである。しかし今親鸞聖人が感動をこめて語っているのは、信心の徳である。本願力に遇うことができた心の徳である。本願力を信樂する心には、信心の徳としてあの無上涅槃界としての浄土の徳が、現在に開

かれています。穢土にある身に、仏本願力としての「不断煩惱得涅槃」の徳が賜ってあるのである。もっと強調的にいうならば、親鸞聖人が「能発一念喜愛心、不断煩惱得涅槃」と感動をこめて讃詠するところには、煩惱を断ずることのできないこの身のままに、願力不思議の信心の賜物として、「不断煩惱得涅槃」の浄土の徳は今現にここに獲得されてある、そういう無限の感動と確信が吐露されているのだ、というべきであろうか。我々が一度び本願力に値遇し奉るならば、そこに開かれた往相の大信心は、真直に無上涅槃に直面する。本願無生の生としての願生の自覚道において、浄土の無上涅槃の徳は、煩惱の身のままにその一分がまさしくわがものとせられているのである。一念の信は、まさしく無上涅槃に連なる。親鸞聖人の信心の自覚であるあの驚くべき現生不退の確信は、こうして的確にその内容が与えられたのであった。我々はしかしながら、現実を忘れて涅槃を夢みてはならない。「不断煩惱」を、我々は煩惱を断ずることのできないままに、と了解した。だから、「得涅槃」の無限の慶びは、「不断煩惱」という自分の虚妄性と染汚性に対する、鋭い凝視と深い懺悔に支えられている。「不断煩惱得涅槃」の本願不思議の信に、我々は自力の心をひ

るがえし捨てて始めて、廻入することとなるのである。自力のころをすつといふは、やうやうさまさまの大小聖人善悪凡夫の、みづからがみをよしとおもふころをすて、みをたのまず、あしきころをかへりみず、ひとすちに具縛の凡愚屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。(『唯信鈔文意』) この文は『歎異抄』の「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまひらすればこそ、他力にてはさふらへ。」という言葉を直ちに想い起こさせるのであるが、「具縛の凡愚」が「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」ことができるのは、これらの文章による限り、「みづからがみをよしとおもふころをすて」て、「ひとすちに不可思議の本願を信樂する」ことよってである。このことを『正信偈』の文、乃至は実際の宗教的経験の事実に立っていい直してみるならば、我々が本願に値遇してそこによく「一念喜愛の心」を起こすことができた時、始めて我々は「みづからがみをよしとおもふころ」、即ち自力の心||自己絶対化の主張をひるがえし、捨てることができるのであり、その転換において、「煩惱を具足しながら無上大涅槃

槃にいたる」現生不退道を獲得することとなるのである。

親鸞聖人は「廻心といふは、自力の心をひるがえし棄つるをいふなり」といわれるが、若しこの転換を廻心というならば、「不断煩惱」といい、「煩惱を具足しながら」というのは、煩惱が廻心懺悔の内容となったことを意味する。煩惱が懺悔の内容となったとは、自分が無始時來煩惱の身であることが、挙体的な懺悔の中で明々白々に凝視されたことであり、自分は如何にしても煩惱を断ずることができぬ身であるということが、深い傷みの中に、はつきりと自覚されていることである。凡夫の身、もとより煩惱を離れ捨て切ることとはできない。しかしこの時、煩惱はもはや転ぜられて、我々を悩まし煩わすことはない。煩惱は煩惱のままに寂滅するのである。このような廻心懺悔を伴って、本願の信は現前するのであり、これを機として「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」、誓願不思議の事実ははたらくのである。

ただし『唯信鈔文意』が、廻心を「自力の心をひるがえし棄つる」というのは、注意さるべきことであるように思われる。自力の心は即ち自己絶対化を主張する心として、それ自身煩惱の随一でありながら、今、誓願不思議がはたらく場にあつては、最も問題的な煩惱である

からであろう。「自力といふは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのみととなり」（『一念多念文意』）と鋭く指摘されてある自力の執心。自力のはからいこそ、仏智の現行する場としての誓願不思議の事実の中にあつて、それに盲目であり、それ故に如来広大の恩徳に対する、最も強力な反抗であるからである。従つて「不断煩惱」という時、仏智不思議を信ずる中で、殊にこの自力の心が如来に背く心としてまざまざと見すえられているのである。

のみならず、若し自力の心。自力のはからいの上に成立する世界を「思議」の世界とするならば、誓願不思議の世界は、この思議の世界が、上述のような意味で破られ、転ぜられる時にのみ、現前するような世界であつたのである。

四

ここまで考え到つた時、私は親鸞聖人のあの問題多い往生観について、一つの知見を持つことができるように思う。宗祖の往生観については、『化身上巻』の「三願転入」の文にのみじくも語られていることは、周知の通りである。暫く親鸞聖人の言葉に聞こう。

真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を獲ず。故に宗師は、彼の仏恩を念報することなし、業行をなすと雖も、心に輕慢を生ず、常に名利と相応するが故に、人我自から覆うて、同行善知識に親近せざるが故に、楽みて雜縁に近づきて、往生の正行を自障障他するが故にと云えり。悲しき哉垢障の凡愚、無際より已來、助正間雜し、定散心雜するが故に、出離その期なし。自ら流轉輪回を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。良に傷嗟すべし、深く悲歎すべし。凡そ大小聖人一切善人、本願の嘉号を以て己れが善根とするが故に、信を生ずること能わず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能わず、故に報土に入ることなきなり。是を以て愚禿積の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によって、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く雙樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、偏えに難思往生の心を発しき。然るに今特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。速かに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲う。果遂の誓、良に由ある哉。ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。至徳を報謝のために、真宗の簡要を擽うて、

恒常に不可思議の徳海を称念す。弥これを喜愛し、特にこれを頂戴するなり。

宗祖の往生観について正当な了解をもつことは容易ではなく、恐らくは十分な思索の手續が要ることが思われる。だから全くの試論に過ぎないのであるが、この三願転入の文に語られてある、所謂三往生について、「雙樹林下往生」については、我々は比較的容易にその了解をもつことができるようである。『浄土三経往生文類』によれば、これは「觀經往生」と解釈されているものであり、とすれば、浄土教の歴史が永く伝承した最も基礎的な往生観である。「浄土を忻慕」と定義されている通り、「厭離穢土、忻求浄土」の心情と、現身の罪障の傷みに促されての願生心である限り、人間にとって最も素朴にして且つ直接的なる往生の要求であるが、しかし「臨終來迎」を期待し、肉身の死の彼方に祈り求められる、所謂未來往生である外はない。そこには親鸞聖人が「方便化土の往生」と決断した問題がひそむのであるが、指摘されてあるのは、実体的な浄土観の上に立っての往生ということであろう。その限りこの往生は、如何に熱烈に忻求されても、やはりそこには一つの神話的限定があることは、免れ得ないことと思われる。

これに対して、親鸞聖人が恐らくは本願無生の生の教説に指南されて獲得したものが、「難思議往生」、若し『浄土三経往生文類』の解釈に依るならば、「大経往生」である。因みに『三経往生文類』の文を引こう。

大経往生といふは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力とまふすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらるに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相廻向の真因なるがゆへに無上涅槃のさとりをひらく、これを『大経』の宗致とす。このゆへに大経往生とまふす、また難思議往生とまふすなり。

親鸞聖人にとって、真実の往生といわれるべきものは、この文に明瞭に語られてあるように、そして『歎異抄』第一章の劈頭の文が示唆的に語るように、全く、誓願不思議に帰して獲得された願生心の内容に外ならない。即ちこれまで總説して来たところの、如来の不虚作持功徳を根拠とした「不断煩惱得涅槃」の現生不退道こそ、まさしく難思議往生といわれるべきものである。それがよく、「聞其名号信心欢喜乃至一念、至心廻向、願生彼国即得往生不退転」という『大経』の経意にかなう故

に、「大経往生」といわれるのであって、そこに獲得された一無礙道に立つ自覚こそ、親鸞聖人の到り着いたところの、一点の神話性をも止めることのない、真の往生といふべきものではなからうか。その意味で「難思議」とは、これまで述べて来た意味での「不可思議」と同義語と解されなければならない。但し敢えて私見を加えれば、難思議の難には、「難遇今得遇」の難の香りがこめられているのではなからうか。遇い難くして、しかも如来に値遇し奉つることができた時、我々の分別を破って、全く思いがけず獲得される、一無礙道により生死を出ずる自覚。この信仰生活の感激をこそ、往生というのだと解することができるのではあるまいか。

これに対して「難思往生」の内容は複雑である。前の三願転入に先行する「真門結釈」の文は、この往生の問題点を鋭く指摘していると考えられるが、更に『三経往生文類』の文によってそれを確かめよう。

弥陀経往生といふは、植諸徳本の誓願によりて、不果遂者の真門にいり、善本徳本の名号をえらびて、万善諸行の少善をさしおく、しかりといへども定散自力の行人は、不可思議の仏智を疑惑して信受せず、如来の尊号をおのれが善根として、みづから浄土に廻向し

て果遂のちかひをたのむ、不可思議の名号を称念しながら、不可称不可説不可思議の大悲の誓願をうたがふ、そのつみふかくおもくして、七宝の牢獄にいましめられていのち五百歳のあひだ自在なることあたはず、三宝をみたてまつらず、つかへたてまつることなしと、如来はときたまへり。しかれども如来の尊号を称念するゆへに胎宮にとどまる。徳号によるがゆへに難思往生とまふすなり。不可思議の誓願、疑惑するつみによりにて難思議往生とはまふさずとしるべきなり。

曾我量深先生の教示によるならば、仏智疑惑の根本には不了仏智があるという。『正信念仏偈聽記』 仏智を了せずということが、若し先生の了解されるように末那識の深層においてあるものとすれば、これは人間にとって本能的である自己絶対化の心 自力のはからいのはたらく事実であるといわなければならぬ。如来の尊号に値遇しながらも、そこに開かれる宗教的自覚が猶純潔な、透明なものであることができず、全体が「自分の」宗教心として、殆んど無意識的に固執せられているのであろうか。信仰が「私の信仰」といわれるような性格をもつということは、「不可思議の名号」に触れながらも、「誓願不思議」の大きな事実が心で暗く、人間の思議を超えて

はたらく「仏と仏とのおんはからい」の事実を、敢えて思議し、念仏の宗教的自覚を、人間的な宗教心として執取しようとする意味をもつものであるうか。「難思往生」の左訓に「じりきのねむぶちしやなり」とあり、前出の「大経往生」の文の中に、「これを難思議往生とまふす、これをこころえて他力には義なきを義とすとしるべし。」とあるのを思い併すならば、「難思」といわれるのは、「義なきを義とす」不可思議の世界を、敢えて思議する人間の意識的宗教心の本質と共に、その問題性をも自力の執心としてめぐり出すような意味をもった言葉であろうか。兎に角、この難思往生において、人間の宗教心はその限界に立つのである。そしてこの立場が破れない限り、念仏往生といいながらも、本願無生の生である難思議往生であることはできず、遂に再び、古い実体的な未來往生に頽落して行くおそれを、必ずもつといわなければならぬのであろう。

仏智うたがふつみふかし

この心おもひしるならば

くゆるこころをむねとして

仏智の不思議をたのむべし。

「廻心といふは、自力の心をひるがへし棄つるをいふ

なり。」といわれる廻心は、勿論宗教心の展開する凡ゆる道程でいわれるべき事柄であるけれども、人間の意識的宗教心のいわば絶頂ともいふべきこの状況において、殊に決定的な意味をもつものではあるまいか。たしかに、自力の心を翻し棄てることがなければ、我々は他力不思議に入ることはできない。しかし、廻心において自力の心を転捨して、本願他力に疑いのない心を転得するとは、一体どういうことであるのか。我々はその意味を、「自力の心をひるがえし棄つる」という『唯信鈔文意』の言葉、「仏智疑う罪深し、この心思い知るならば、悔ゆる心を旨として、仏智の不思議をたのむべし」という、廻心懺悔を表わすこの『疑惑和讃』、そして『正信偈』の「不断煩惱得涅槃」という叫びを受け止めて、三思三省すべきであろう。少くともはっきりと自覚されなければならぬことは、不可思議の世界をしかも思議しようとする自力のはからいは、実は不了仏智を内に秘めた仏智疑惑の行為であり、若し清沢満之の言葉をかりるならば、「如来の仕事を盗む」という行為であって、宗教的にまさしく深い罪であるということである。この一点に、凡夫といわれるものの染汚性の根源がある、ということである。そういう自覚を機として、誓願不思議なる事實は、

現にこの身にはたらくのであるに違いない。

「誓願不思議」をここまで辿って来るならば、これはまさしく大乘の徳を表わすものである。私は前に、「得涅槃」の無限の慶びは、「不断煩惱」という自分の虚妄性に対する鋭い凝視と深い懺悔に支えられている、といった。即ち、廣大無辺際なる無上涅槃の徳と、穢悪汚染の煩惱の自覚と、この二つは絶対に分齊を異にしなしながらも二つのままで一如である。このような了解をもった時、私は『教行信証』に、親鸞聖人がしばしば「円融」という言葉を使用する意味を、正當にうなづくことができるに違いないと考える。「教巻」は眞実教を讃嘆して、「速疾円融之金言」という。「行巻」は眞実行を「円融眞妙之正法」といい、「総序」は「円融至徳嘉号」と讃嘆する。「信巻」は大信心を「証大涅槃之眞因、極速円融之白道」と嘆息する。円融とは、前述の意味での大乘の徳を表わす言葉に外ならないのである。これによって、浄土眞宗の行信道は、まさしく大乘の仏道であることが確立したのだと、いうべきであろうか。

終りに、親鸞聖人が獲得した、浄土眞宗なる仏道を表白する言葉を、ここに引いておきたい。

敬うて一切往生人等に白さく。弘誓一乘海は無碍・無辺・最勝・深妙・不可説・不可称・不可思議の至徳を成就したまえり。何を以ての故に。誓願不思議なるが故に。〔教行信証〕行巻〕

凡そ誓願について、真実の行信あり、亦方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真

実の信願は、至心信楽の願なり。これすなわち選択本の行信なり。その機は則ち、一切善惡大小凡愚なり。往生は則ち、難思議往生なり。仏土は則ち、報仏報土なり。これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。大無量寿經の宗致、他力真宗の正意なり。〔教行信証〕行巻)

求むる心と信ずる心との約束

本當の吾々の宗教的生活、言ひ換へれば念仏といふものは何ういふものであるかと言へば、念仏といふものはつまり求むる心であつて、同時に招かれて居るといふ事を信ずる心を含んだものである。求むる心に於て招きたまふ仏を念ひ、招きたまふ所の仏を念ふ事に於て更に求むる心を生ずるのであります。信ずる心の現はれだからして求むる心がなくなるといふものでない。なぜならば、信ずる心と求むる心とはちやんと約束されてゐるのであるからして、信ずる心ができて了へばもう求むる心がなくなつたといふ様な訳のものでないと思ふのであります。信ずる心ができれば求むる心がなくなる様なものは、もう信心でないと思ふのであります。それはもう固定的な思想である。固定的な思想でなくて、それが信心である限りは、信ずる故に求むる、求むる故に信ずるといふさういふ様な意味に於て、求むる心と信ずる心といふものは、ちやんと約束されて居るのであります。

(金子大栄著『觀無量壽經講話』より)